

京都大学	博士 (工 学)	氏名	Pilaiporn Nunma
論文題目	The Alternative Approach for Grounding Up Children's spaces in High-density Urbanity of Bangkok, Thailand (タイ・バンコクの高密度な都市性における子どものための空間の代替的整備手法に関する研究)		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、1990年代以降の急速な都市化で子どものための戸外遊び空間を計画的に整備することなく高密度化したタイ・バンコクの都市市街地を対象に、高密度化後からの整備手法とその効果を明らかにする研究であり、遊び空間の整備スケールと整備主体の関係を踏まえた構造的な事例調査から整備の促進に有用な代替手法を示している。とくに、子どもから遊び空間利用実態と空間評価に関する情報を直接収集することを重視し、子どもである回答者が自ら操作する、タブレットを用いたビジュアルアンケート調査(対面実施)、写真撮影サーベイおよびサーベイ結果の確認を手描きイラストで行うビジュアルコミュニケーション手法(オンライン実施と後日現地確認)を導入した点は特徴的であり、子どもに関わる調査データの信頼性と具体性に優れた論文となっている。</p> <p>第1章では、研究の背景、目的を述べ、バンコクの高密度都市としての特徴と、子どものための空間論の世界的学術動向を整理し、本論文における研究方法とその意義を述べている。バンコクの都市化現象に関する既往研究が9つの主題を扱っていることを把握し、それらを高密度化との関連の強さから集成し、都市圏全体構造、公共交通・公園施設、ミクロな集住地、の3点をバンコクの高密度な都市性を扱うフレームとして設定している。子どもの戸外遊び空間研究については、教育学・建築学・都市計画学・造園学・芸術学等の分野横断的かつ国際的な学術的議論をレビューしたうえで戸外遊び空間の整備主体に着目し、公共団体、地域主体、専門性をもつデザイナー、の3種をとりあげ、整備主体と都市性のフレームの対応関係を反映した論文構成を設定している。</p> <p>第2章は公共団体による整備を扱っている。バンコク大都市圏行政がマスタープラン(対象年2013-2033年)の一環として策定したGreenBKK2030計画によって事業化された、道路高架下における中規模スケールの戸外遊び空間整備事業を対象とし、利用実態、空間評価を分析している。利用している子どものビジュアルアンケートと行動観察、整備計画詳細の採取調査を2020年1月時点で開園していた8事例を対象に行い、8事例とも幹線道路に面した立地で大半をスポーツ空間が占め、子どもの遊び空間は事業地のごく一部に限られ、子どもの利用は少人数・短時間利用に留まっていることを把握している。鉛直方向動作が活発にできる遊びが好まれ遊具・舗装・日よけ・フェンスの素材等ミクロスケールの設計に関心が高く、大人利用ゾーンが隣接し大人がいる安心感、直射日光を避ける必要等の具体的な指摘は、中規模の事業地ながらミクロスケールでみられている。事業地が隣接する地区コミュニティとは交流が見られないことも明らかになり、人口の多い立地にありながら子どもの戸外遊び空間としては定着していないことを指摘している。</p> <p>第3章は、第2章の事例の1つに隣接するDuang Khae地区を対象とし、地域主体としての地区コミュニティによる遊び空間の整備を扱っている。同地区はかつて、鉄道駅近接の無許可集住地であったが、地区内に設立された財団と居住者がコミュニティ組織育成に成功したことから、後に公式に認可された高密度集住地である。写真撮影サーベイとビジュアルコミュニケーション手法によって得られた調査成果から、街区</p>			

京都大学	博士（工学）	氏名	Pilaiporn Nunma
<p>内の幅員 1.8m の細街路、財団の小庭、集合住宅前と寺院のスペースが、往来できる戸外遊び空間であることを発見している。地区の中心点にあたる住民が会合時に集まる小空間が子どもの遊び空間の中心点ともなっており、そこから幹線道路を横断しない範囲の半径約 100m 圏内に遊び空間がおさまることを把握し、細街路の狭さや空間の極小性は問題とされないこと、幹線道路の横断という危険の回避、大人のいるエリアから離れすぎない大人がいる安心感、歩くには遠隔とまらない距離意識が遊び空間が利用される理由となることを明らかにした。この結果から、第 2 章の事業地の利用が伸びない理由も説明され、地域主体によるコミュニティ内の小空間を遊び空間整備の有用な手法と扱う必要性を指摘している。</p> <p>第 4 章では、第 3 章の地域主体の 1 つである財団によって行われている、遊び空間を地区外にも整備する手法としての壁絵プロジェクトをとりあげている。壁絵はバンコクで計画的整備手法として未活用であるが、絵のデザインと塗装に子どもとコミュニティが関わることで、面的規模に関わらず壁面前を空間と認識することにつながることを指摘され、コミュニティ外・幹線道路沿道まで空間利用の認識が拡張される可能性を示している。さらに諸国の壁絵活動の意義に関する論考を参照し、面的規模によらないこの手法の有用性を評価している。</p> <p>第 5 章では、公共団体・地域主体の両方に協働する専門職である遊び空間のデザイナーを対象に、実務を通じたデザイン案の実現性、行政と地域主体の主体連携可能性について扱っている。計画的整備では工期と予算の不足を補う地面塗装の導入がみられ、塗装が手法に含まれることが第 4 章との類似性であるが、地域主体との協働は代表者との調整に留まり稀である実態を明らかにしている。</p> <p>第 6 章は結論であり、各章で得られた成果を総合し、子どもの戸外遊び空間の整備は、計画的な中規模整備よりも、ミクロな集住地の都市性に依拠し、安心な地区コミュニティの関わりとミクロスケールでの空間評価が重要で、代替手法としては子どもと地域主体が関わる壁絵を用いた手法が、高密度な都市性に有用であることを示している。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、子どもの戸外遊び空間を計画的に整備することなく高密度都市化したタイ・バンコクにおいて、高密度化後からの整備が促され得る有用な整備手法を明らかにしたもので、面的規模を確保する計画的整備よりも、子どもと地区コミュニティが関わる安心な小空間に遊び空間利用の実績があり、壁絵等の小空間整備が高密度な都市性に有用な代替手法として可能性があることを提示するものである。得られた主な成果は次のとおりである。

1. 2010年代策定のバンコク大都市圏マスタープランに基づいて整備された、道路高架下の中規模整備事業地では、遊び行動の特徴に関する知見が得られたものの、幹線道路を横断してアクセスする立地は子どもからは遠隔で安全ではなく、利用が少ないことを明らかにした。
2. 細街路からなる高密度集住地では、街区内の面的には狭い小空間による戸外遊び空間が地域主体により整備されていることを明らかにし、あわせて大人の存在の安心感、遠隔になりすぎない距離感の重要性を示した。
3. 地区コミュニティ以遠にも戸外遊び空間を実現するには、面的規模よりも壁に着目した子どもとコミュニティの参画を伴う壁絵製作が空間認識を促し、整備手法の代替案としての有用性があることを示した。
4. 遊び空間のデザイン専門家にも、地面塗装の導入がみられ、壁絵との類似性が見いだされたが、コミュニティとの協働が未発達であることを指摘した。
5. 以上の結果から、有用な子どもの戸外遊び空間は、面的規模は必要ではなく、大人のいる安心感、遠距離にならない距離認識が優先的であり、小空間に子どもとコミュニティが関与することが有用な代替整備手法であることを提示した。

以上のように、本論文は、急速な高密度化が生じた後のバンコク大都市圏において、子どもの戸外遊び空間の整備には、子どもと地区コミュニティが関わる小空間の整備実績に着目し、ミクロな集住地の都市性に応じた代替手法として有用であることを提示するもので、同様な都市化を経験した諸国のメガシティにも影響のある新規な手法を提案し、学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士(工学)の学位論文として価値あるものと認める。また、令和5年12月19日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行い、申請者が博士後期課程学位取得基準を満たしていることを確認し、合格と認めた。